

第2回高知県社会教育委員会（令和5年4月1日～令和7年3月31日任期）会議概要

令和5年12月25日（月） 14時～16時

高知県立塩見記念青少年プラザ 5階多目的室

出席委員 久寿久美子、三谷七香、岩井拓史
徳増千里、眞鍋大輔、森岡千晴
吉田友一、斉藤雅洋

1 開会（14：00～14：05）

高知県社会教育委員長挨拶

2 議事（14:05～15:50）

（1）令和6年度高知県社会教育関係団体への補助金について【資料1・2・3】

事務局から説明

（2）「これからの社会教育と若者世代」について【資料4】

①若者世代とは

【事務局から提案】（参照資料2）

「これからの社会教育と若者世代」のテーマで協議を進めていく上で、本委員会として「若者世代」を定義する必要があると考えた。法律上の定義や辞書上の定義などを参考に、本委員会として15歳～39歳を若者と定義することを提案する。

（委員）

厳密に15歳～39歳ということではなく、「概ねこの年代」という捉え方で良いか。
また、年代の幅が広く、ターゲットを絞った話がしにくいのではないか。

（委員）

人口減少や少子高齢化などの課題の解決に向けて、若者に社会教育に関心を持ってもらい、盛り上げていきたい、ということが前提にあると思う。県として「若者世代」に何を求めるのかによって、年代の幅が決まるのではないか。

（委員）

提案の年代の幅の中でも、10代、20代、30代それぞれ状況が違う。世代ごとの現状把握が必要ではないか。

(委員長)

提案の年代は幅広いが、各委員が念頭に置く「若者世代」を包み込んだ設定であると考え。本委員会としては、若者世代を「概ね 15 歳～39 歳」と捉えて協議を進めていく。

【事務局から説明】(参照資料 3)

(委員)

活性化の意義を考えるときに、人口減少などの数値だけでなく、人と人との循環やつながりの点に着目してはどうか。若者の横の繋がりが希薄化し、地元で出会う・学ぶ機会があるのに、地域外に出て行ってしまっている。それをどう食い止めていくか。楽しさ、面白さを内包した形で訴えかけていくことで流れが変わっていくのではないか。

県外から移住してきて、高知県はいろいろな地域でイベント等が多いと感じる。それをもっと大々的にアピールしていく事で、人の流れも変わるのではないか。

(委員)

同じく移住者として、高知県はイベントが多いと感じている。しかし、イベントが多いために主催者側が疲弊し、若者世代が離れていくという逆効果も起こっている。打ち上げ花火のようなイベントではなく、細く長く続くような取組が必要ではないか。

地元高校生から、学校の行事ではなく自分たちで音楽イベントをやりたい、という相談があり、商工会やNPOなどの地元の団体(大人たち)が関わり、高校生たちが地元で協賛金を集めてイベントを行った。高校生たちにとっては自分たちのやりたい事が実現できたが、協力や協賛金をいただいた地元地域への感謝や「地域のために」という意識には繋がらず、地元を盛り上げるイベントとはならなかった。その反省として、地域への愛着等を根付かせるには、もっと低い年齢からのアプローチが必要だと感じた。

(委員)

若い世代に地域・社会のリーダーに育ってもらいたいという大人の思いは、一方で若者の生きづらさにも繋がる。若者のうちは、心の矢印が内向きでも良いと思う。社会教育等を通じて自分や地域の可能性を広げ、結果的に地域・社会のリーダーとなる人材になっていくことは大事だが、そういう人材を育てようと思わない方が良いと考える。

(委員)

自ら人と関わりたい、そこで楽しみたい、という思いがなければ、社会教育の意味がない。そして、自分たちの楽しみだけでなく、地域のためという思いに繋がるよう仕組んでいくような教育が必要である。

②第1回社会教育委員会の概要、③協議の柱と今後のスケジュール

【事務局から説明】(資料4)

第1回社会教育委員会の協議内容をまとめた結果から、協議の柱を、

- ア どのような若者に育てていくか
- イ 若者にどんな環境(活躍の場・機会)があると良いか
- ウ 地域・保護者の役割とは

の3つとすることを提案する。

(委員)

(先ほどの事例を聞いて)若者世代に大人の都合のいい期待をするのではなく、それぞれの若者が「自分の人生を輝かせる体験」というものを経験する機会を確保することが大切。そこから年齢を重ね社会経験を積んでいく中で、「あの時の経験は地域社会の誰かに支えられてできていた」ことに気づくと、主体的に「社会を良くするために何かしたい」という考えに繋がっていくのではないかと。

そして、「社会のために何かしたい」と思ったとき、その活動に参加する窓口が容易にわかるようになっていないといけない。

(委員)

アでは、学校教育に限定せず、地域等も含めた子どもにとっての教育のあり方と捉えたら良いのではないかと。学校に限定せず地域も含めて子どもたちを見ていくことで、「郷土愛」などの言葉だけではなく、具体的にその地域でどんなことができるかや、どんな面白みがあるかなどを伝える教育ができるのではないかと。

(委員)

地域学習や地域学校協働活動の根本には「みんなが楽しい町づくり」というものがあり、地域の方・子どもたちの双方が好きで、楽しいこととして自然に関わり合う、連携し合うことが本来の姿であると考えます。

(委員)

興味を持たせるには、その担い手や関わっている人に当事者意識を芽生えさせないといけない。その手法として、課題よりも目標から語り合うことで充実感を生み、試行錯誤がより着実なものになるのではないかと。そこから関係性が広がったり、目標が言葉になる事で人を引きつける力になったりする。また、目標をデザインしていく上では、大勢に向けて想定しがちだが、一人の体験を想定し、個人のやりたいことや楽しかった体験を大人が吸い上げ、それを関わった人、周りの人にスライドして広げていく、という方法をとることで、実行力ある目標とできるのではないかと。

(委員長)

(先ほどの委員の話を聞いて) 地域の能動的な動きを後押しすることや、課題ではなく目標を共有することなど、学校運営協議会の役割に関わる話があった。ウの柱の中に学校運営協議会や地域学校協働活動の課題を付け足してはどうか。

(委員)

若者がいきなり直接地域と繋がって交流することは難しいと感じている。中間の世代が若者と地域のつなぎ役となり、スムーズな世代交流ができる。柱のイで、つなぎ役の必要性や世代交流の必要性について、高知県の現状や事例を集めてはどうか。

(委員)

社会教育に携わる上で、学校教育の在り方や教育のトレンドを最低限理解していないといけない。その点で、アで学校教育に触れていることに賛成である。

文章表現として、アの「…育てていくか」を「…どうなってもらいたいか」「…育ってもらいたいか」など表現の仕方を変えた方が良い。

(委員長)

これまでの協議をうけ、事務局から提案のあった3つの柱で今後協議を進めていく。

【今後のスケジュールについて事務局から説明】

3つの協議の柱について、各委員が実践している取組を共有し、そこから学ぶことが必要と考える。今後第3回～5回の社会教育委員会で、ア、イ、ウについて各委員から「私の提言」として報告していただくことを提案する。

(委員)

5分程度の設定であれば、全員が全部の柱について発表可能ではないか。

テーマとする柱は、ア、イ、ウの順が良い。

→ (委員) ア (学校教育関係) については、学校、教育委員会関係の委員の方から学ばせていただきたい。

(委員長)

発表時間はそれぞれ負担のない範囲で、また発表内容や資料も、他の機会で開催されたものがあればそれで構わない。

(委員)

職業上、学校現場の現状、地域の役割どちらにも関わっている。それぞれ一つの柱への割り振りとなるが、複数にまたがる発表内容となる。

(各回の柱、委員の割り振りを以下のとおり決定)

- ・第3回(2月) ア (久寿委員、川上委員、三谷委員)
- ・第4回(3月) イ (森岡委員、眞鍋委員、吉田委員)
- ・第5回(5月) ウ (徳増委員、岩井委員、佐竹委員)

※発表時間は15分程度、また、ア、イ、ウの複数にまたがる内容となっても良い。

※第3回以降の日程については、後日事務局から日程調整をさせていただきます。

※欠席の委員には、事務局から連絡をする。

④その他

- ・社会教育実践交流会について(事務局から説明)

3 閉会

生涯学習課長 挨拶